

「尾形光琳筆「中村内蔵助像」と人物表現の魅力」展によせて 館蔵の肖像画「中村内蔵助像」「伝東山天皇像」をめぐって

大和文華館の江戸時代の肖像画としては、尾形光琳の代表作の一つである「中村内蔵助像」がよく知られていますが、近年「伝東山天皇像」も所蔵に加わりました。本稿ではこの二点の作品に注目したいと思います。

まず、「中村内蔵助像」(図1)について。この作品は、仏文学者で古美術蒐集家としても著名な青柳瑞穂が、昭和12年(1937)にある骨董屋で見出しました。光琳の描く人物画は、王朝物語や謡曲などの古典を題材としており、肖像画は知られていなかったことから、当初は偽物扱いであり、7円50銭で瑞穂は購入したと言います。この頃の大卒の公務員や銀行員の初任給は約70円でしたから、今に換算すると2〜3万円ほどでしょうか。瑞穂が美術研究所(現在の東京文化財研究所)に勤めていた知人の菅沼貞三にこの作品を見せると、菅沼貞三は落款や顔貌描写、構図の特色から光琳真筆として、翌13年の美術雑誌で発表しました。当時の美術研究所所長は、大和文華館初代館長となる矢代幸雄で、その後、この作品は大和文華館の所蔵となります。

この作品には三つの賛があります。肖像画の賛は、像主が誰であるのか、どういった目的でいつ制作されたのかを知る手がかりとなります。平璋元伸が元禄17年(1704)に書いた

のが左の賛であり、36歳の藤原信盈があらかじめ没後の戒名を定め、自分の肖像を描かせ、自筆の一句を残したものであると内容が記されています。平璋元伸は、銀座役人・算学者の中根元主のことで、中央の賛「瘦せけれと腹にこめたり春の山」には、藤原信盈の署名があり、これが像主自筆の句です。右の賛は信盈の子が後に加筆したもので、信盈が享保15年(1730)4月25日に60歳で亡くなり、京都の樋口善導寺に葬られたことが記されています。これらの賛から、像主は藤原信盈で、信盈が36歳の時に描かせた肖像画であることが分かります。光琳は年紀のある作品が少なく、この作品は元禄17年に描かれたことが分かる点でも貴重です。この時期の光琳は、法橋となって3年目であり、画家としての活動が盛んになっていました。衣裳の張りのある曲線、三角錐に収まるような顔や脚の配置など、光琳が好んだ求心的な構図の特色がよくあらわれています。

さて、この作品は、昭和13年当時「藤原信盈像」として紹介されていました。賛から分かる像主の名前に因んだものですが、菅沼貞三は光琳関係の書状や契約書を精査し、藤原信盈が銀座年寄で光琳の最大の支援者であった中村内蔵助と同一人物であることを十数年後に明らかにしました。この制作の翌年に、内蔵助は京都から江戸へと移動になり、光琳も内蔵助を頼って顧客開拓のために江戸に向かいます。

像主が明確になったことで、この作品は光琳研究にとってより重要なものとなりました。内蔵助と光琳は大変親しい関係でありましたが、内蔵助の容貌は、光琳の古典人物画とあまり差異はありません。容貌を逼真的に描くのではなく、洗練された衣裳や凛とした表情・姿勢の中に、内蔵助の人となりが込められています。

「中村内蔵助像」には賛や落款があり、光琳研究が進展しましたが、続いて紹介する「伝東山天皇像」(図2)には賛も落款もありません。ただ、作品が収められた箱に「東山天皇 宸影」と墨書されています。箱はそれほど古いものではなく、なぜ像主を東山天皇(1675〜1710)と特定したのかは不明です。そこで、絵画から像主や筆者について探りたいと思います。まず、像主の衣裳を見ると、垂纓冠を被り、直衣と長い紅の袴を着ています。これは御引直衣といい、天皇の日常着です。手にもつ檜扇に菊紋が施されていることから、天皇を描いていることは確かです。皇室の菩提所であった泉涌寺には、桃山から江戸末期に至るまでの代々の天皇の肖像画が伝わっています。泉涌寺蔵の東山天皇像は烏帽子に直衣姿ですが、後光明天皇(1633〜54)、桃園天皇(1741〜62)、後桃園天皇(1758〜79)、仁孝天皇(1800〜46)、孝明天皇(1831〜67)は、垂纓冠に御引直衣姿です。垂纓冠の纓(後ろの帯状の部分)は、桃園天皇までは下に垂れていますが、後桃園天皇以降は跳ね上がっています(図3,4)。この垂纓冠の変遷からすると、纓が下に垂れている当館所蔵の「伝東山天皇像」は、18世紀半ば以前

の天皇像と考えられます。続いて像主の周囲に目を向けると、縹緗縁の上置に褥が敷かれ、上方に萩蝶文の帷と瑞雲が描かれています。このような周囲を荘厳した神像形式の肖像画は、豊臣秀吉像や徳川家康像、高い身分の女性像などに見られ、桃山後期から江戸前期の作品に多いです。「伝東山天皇像」の袖の形状や衣文線は固く、類型化した描写が見られますので、江戸時代初頭までは遡らず、1700年前後頃の制作ではないかと推察されます。東山天皇は1710年没であり、絵画表現と齟齬はありません。ただ、神格化されているので、歴史上有名な天皇を描いている可能性もあります。泉涌寺蔵の「東山天皇像」と比べると、顔幅が広いという共通点はあるものの容貌にあまり大きな類似点は認められません。黒目が上に寄った描写などは、住吉具慶(1631〜1705)周辺の作品に比較的似ていますが(図5,6)、輪郭がやや平板で、住吉派の作とは断言できません。像主や筆者を特定することはできませんでしたが、今後も類似作品を探していきたいと思います。今回の考察から導き出した17世紀後期から18世紀前期頃の制作とすると、「中村内蔵助像」と近い時期の肖像画となります。衣裳が、ボリューム表現を重視した誇張した形状となっている点は、相通じる造形感覚と言えるかもしれません。(宮崎もも)

※図3,4は『日本の美術387天皇と公家の肖像』(至文堂、1998年)、図6は『江戸のやまと絵-住吉如慶・具慶-』(サントリー美術館、1985年)より複写しました。



図1 中村内蔵助像
尾形光琳筆



図2 伝東山天皇像



図3 桃園天皇像 泉涌寺蔵



図4 後桃園天皇像
泉涌寺蔵



図5 伝東山天皇像(部分)



図6 元三大師像(部分)
住吉具慶一門合作 護国院蔵